

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 38 号

発行日
2024.10. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○見えてきたのに、伝える術がない!!場や関係もない!!

悔しいことであるが、折角見えてきたのに、それを伝える術がない!場や関係もない!が、そのことを分かってもらい、手伝えるものがあつたら、微力ながら(本当にそう!)協力したい!それが、ここ最近の私のスタンスであるが、なかなか現実には厳しい!しかし、そこに義と理があるのなら、いつかは届く!!そのことを思い続けていくのが、私の宿命?そんなことを思いながらの日々でもある(が、いつまで?)!

とは言え、みんな、それが重要だと思つてはきているのである!ただ、各々の眼前の問題に振り回されて、全体を見ていくことが出来ないのである!!今回の選挙もまた、まさにそういう様相を呈している(何のため、誰のための選挙か?)!!しかるに、その伝えるべきこととは何か?それは、「教育」へのまなざしの変化である!「政治」にしる、「経済」にしる、それを支える(それをよい形にする)人間(子ども)が育つて(生まれ)いないならば、社会(国)そのものが危ない!

「政治と力ネ」とか、「守る」とか、「地方創生」とかいうような言質はあるが、本当に今やる(解決される)べき課題とは何か?目下、教育の世界、それを支える地域社会はどうなっているか?学校(教師)は委縮(疲弊)し、地域は一枚岩ではなく(崩壊状態?)、子ども達は、学力はともかく(それ自体は悪くなっていない?)、いじめや不登校等で深刻な状態にある!本当に、これでいいのか?政治、経済、そして教育は、国/社会の要(トライアングル?否、鼎!)である!

だから、政治は、経済と教育の双方から論じなければならぬのである(危険ではあるが!)!まらつくりとひとつくりが循環するということは、実は、そういうことでもある!

○もう少し、続けると!

上記では、かなり上擦つた言を為したようにも思うが、実際は、それを前提とした論議(候補者達の政策提示が為されているとは言えるであろう(少なくとも一人はいる!))だが、「教育」に関わつては、歴史的な反省もあつて、法制度的には、政治が、ある意味土足では踏み込めないようになってきている!しかし、そうした隘路?の中で、自らの知恵と努力で、力強い歩みを為している自治体や学校、そしてNPO法人等の、言わば名も無き人々の取り組みもある(これらについては、別途書き進めている「新・教育協働への道」で紹介している!)!

だが、如何せん、それらは、まだまだ小さな歩みであり、しかも、全体としてみれば、局的、散逸的である!!だが、その取り組みの意義(先駆性や汎用性)を積極的に認め、そうした動きを、言わば国策として展開していくならば、まだまだ可能性はあるし、将来を悲観することもない!!教育の力は、強いのである!ただし、問題は、それらをバラバラに行つてはいけないということである(↓学校教育と社会教育の一体的取り組みの必要性)!

誤解されては困るが、その反省なり、しくみ自体を批判としているわけではなく、現下の諸課題を解決するためには、そこでは、経済の力が、どうしても必要であるということ(益殖局は、予算、経費の問題となるではないか?)、そして、その最適な配分や使い方を為すためには、政治の力が必要であるということである!だが、それは、これまでのような「限られたパイの奪い合い」ではない!そこに、三者の協力(努力)と知恵が必要なのである!

○アニミズム的な自然観・世界観が注目されている!!

話は変わるが、過日、ネット上で、面白い論稿(広井良典「日本が『アニミズム』が保たれた3つの根本理由『冥信仰』を踏まえた『飛騨舞』の時代(一)東洋経済オンライン」を見つけた。それによれば、『アニミズム』的な自然観・世界観は近年になって新しい形で注目され、再評価されるようになってきている」という。その大きな背景の一つは、「エコロジーあるいは環境問題への関心の高まり」であり、「人間と自然」、あるいは生命と非生命(さらには有と無)の間に絶対的な境界線を引かず、それらを包括的ないし全体的な視座においてとらえるという意味において、『アニミズム』は新たな現代性をもつに至っている」ということである(何となくではあるが、分かるような気がする!!)。

そして、これは、「いわゆる自己組織性など現代科学の方向とも共鳴する側面をもつており、『万物の中に魂(soul)あるいはアニマ(生命が存在するという信念(animism))』(タイラーによる定義)からしても、ある意味でそれは日本人にとつてはなじみやすい、むしろごく当然とも言える自然観ないし世界観ではないか」。そして、『(自然の中の)八百万の神様』あるいは『鎮守の森』といった表現にも示されるように、日本においては、一つには神道ということも関連しつつ、『アニミズム』的な発想や自然観が広く日常生活や年中行事等の中にさまざまな形で浸透している」ともあつた。

これについては、先般、我が国における「神社」の多さ、そして、そこにある存在の意義みたいなものを述べたが、まさに、軌を一にするもののように思われる。ただ、『「自然資本」への対応には日本の伝統文化が重要な役割』と『鎮守の森』やアニミズム文化をつなぐ』においても述べたように、近年において気候変動や脱炭素をめぐるテーマと同様に大きな関心の対象となりつつある、生物多様性や生態系に関する話題ともつながっていく」というような話は、私には、とても気宇大過ぎて何とも言えないが、人が生きるということの意味や「協力」しなれば生きていけないという価値観(経験値)が、どこまでそれと連動しているのか?またリアルは厳しい?(井上)

○「LOFT」?どうも建築関係ではなさそうだ?!

過日、いつものように、PC上のネットニュースを見ていると、「いい職場を作る『LOFT、カルチャー』の作り方」という記事が目にとまった!ちよつと興味が湧いたので読んでみると、これは、現在の教育界(学校にも大いに参考になるのではないかと思ったりもした!ちなみに、LOFTとは、Light・身軽ですばやく主体的に挑戦する、Open・開放的で、お互いに助け合い、協力し合う、Flat・関係性がフラットで、仲間に感謝し、称賛し合う、Tolerant・耐性、受容性、復元力が高く、粘り強く実行するカルチャー」とある。

「世界のエクセレントカンパニーは組織カルチャーの重要性を経営者自らが認識し、社内に訴えかけ、自ら実践することで、健全で良質な組織の『土壤』を育んできた。思い切り力を発揮し、自己実現できる環境を整えてきたからこそ、世界中から優秀な人材が集まり、新たな価値を生み出すことができています。そして、従業員がのびのびと働ける環境づくりに投資を惜しまず、お金をかけてきた」ともある!

だが、「日本企業は『カルチャー』に投資してこなかった。これまでの日本企業は、『人材に投資する』とは言ってきたが、『カルチャーに投資する』とは言ってきた。…人材と組織カルチャーは『ワンセット』で考えるべきもの…。健全で良質な組織カルチャーがあつてこそ、人材はいきいきと働けるのである」と結んでいる!

面白いのは、「企業(組織)も、人間の成長発達も、同じように、『木』に譬えられる!花・実(利益・顧客満足、幹(事業、根っ子(現場)、土壌(組織カルチャー))!まさに、その通りであるが、企業の方はともかく、人間の成長発達(教育)の方は、他ならぬ、その「土壤(組織カルチャー)」自体が瓦解寸前なのでもある?!

○やっぱり出て来た!共感者はいるのである!!

いつかは、このことが記事となるだろうと思つていたが、やっぱり出てきた!この記事の作者(Kさん)ではないが、今、一番楽しみにしているテレビ番組が、NHKB Sプレミアムにて放送中の『団地のふたり』である(日曜夜10~11時。作家・藤野千夜の名小説原作)!小泉今日子と小林聡美が扮する、団地で生まれた幼なじみのふたり(エチとなつちゃん)を軸とした、ホームドラマ(近所付き合いい物語)であるが、何故かほのぼのとするのである!

その人気の理由を、複数のポイントから解説しているが、この記事であるが、流石?プロである!ここでは、その具体的な紹介は出来ないが、小見出しだけでも十分感じ入ることは出来よう!「『団地のふたり』の温かさ」「視聴者が憧れるノエチとなつちゃんの関係」「人生の機微を豊かにする団地のコミュニティ」「人生の先輩と接することのありがたみ」。最後に、「自分の人生の主演は自分よ!」(前回のキーワード?)ということに締められているが、秋の夜長?は、余計な思いに耽ることもなく、過ぎていく!<短歌に託して秋の夜長は、最早半死半生?!>

・見えてきた! そう思つても

・伝える術なし? だから書いていくしかない!!

・必要なのは 「パイの奪い合い」ではない!

・アニミズム 懐古とアニメで 花盛り?

・LOFT、カルチャー

・折角の造語 教育界にも

・是非広がれ!

・秋の夜長? 余計な思いに 耽ることもなく

・過ぎ行く理由もは テレビにもあり!

<特別コーナー> 堂本彰夫の古代史旅枕 ③<>

○改めて、古代九州の全体像を探る!その9

ということ、おそろく、かの武内宿禰、神功皇后、そして、仲哀天皇及び応神天皇の事績(物語)は、これまで述べてきたような事実を隠蔽するための、ほとんどが創作(捏造?)話であることは言うまでもない!繰り返すように、「記紀」(事実上は『日本書紀』を編纂した、当時の政権勢力(中心人物は藤原不比等!)が、自分達の政権の正統性・正当性を創出すべく、そのような人物群を配置したものだ)ということである(ただし、そこに示されていることは、大枠は真実であつた?その意味では、それに相当する人物・事績はあつたのである?)!!

そこで、その大枠の真実(該当する人物・事績)がどうであつたのか?ということであるが、ここでは、その大枠の真実の前にあつた、3世紀末以降の邪馬台国連合の帰趨(台与王権の結末?)にケリをつけておかなければならない!何故なら、その帰趨のプロセス(衰退あるいは滅亡?近畿/丹波への移動?)が、ここで言う大枠の真実をもたらしたものと考えられるからである(その意味では、邪馬台国東遷説は、この線上にある?)!!

ただし、それが、例の「神八井耳命」の後裔(前方後方墳勢力?)とされる「多氏」(筑紫君/阿蘇君/肥(火)君/大分君)の九州進出(出戻り?)に起因するものなのか?あるいは、『魏志』に示された「狗奴国(球磨會於?)」との攻防によるものなのか?さらには、その双方なのか(「多氏」と「球磨會於」は微妙に絡んでもいる?)?それが、今一つ定かではない!そしてさらに、そこには、情勢の悪化から、半島南部から逃げてきた百済系勢力(本宗家↓藤/藤?)が、流入もしている(周辺に作られた山城/神籠石群は彼らの主導による?)!!

だが、状況は、それだけではない!後の継体王権と筑紫君磐井(九州王朝)との確執(磐井の乱)に見られる、継体勢力の九州王権からの分離・分立が、そこに出来しているのでもある!ちなみに、7世紀初頭の「隋」との交流(日出る処の天子/アマタラシヒコ)は、九州王朝のそれであつたことは言うまでもない!(つづく) (堂本)

<編集後記> 思わぬ事態から、新たな状況が生まれた?生かすも殺すも、自分達次第である!政治も、経済も、そして教育も、自分達が創り出していかなければならないのである!(井上/堂本)